

保育専攻短期大学生の保育者効力感と対児感情の関連 —— 実習による変化の視点から ——

加藤孝士¹⁾・浜崎隆司²⁾・寺蘭さおり³⁾・森野美央⁴⁾・氏家博子⁵⁾・加藤望美

Relationship between Feelings toward Young Children and Preschool Teacher-Efficacy in
Junior College Early Childhood Education Majors.

— Change Through Teaching Practice —

Takashi KATO^H · Takashi HAMAZAKI · Saori TERAZONO
Miwo MORINO · Hiroko UJIE and Nozomi KATO^H

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the relationship between a subject's feelings toward young children and preschool teacher-*efficacy* before and after teaching practice. Study subjects were students majoring in early childhood education at 130 junior colleges. Before teaching practice, the subjects showed positive emotions for young children and preschool teacher-*efficacy*. After teaching practice, the subjects showed a balance between preschool teacher-*efficacy* and positive or negative emotions for young children.

KEYWORDS : preschool teacher-*efficacy*, college students majoring in early childhood education, feelings toward young children, practice teaching

近年は女性の社会進出や少子化など、子育てを取り巻く環境が多様化している。それにより、保育者は多様な価値観を受け入れ保育することが求められ、多くの困難に遭遇する可能性が高まっている。こうした困難を乗り越えていく手立てを探るべく、保育者効力感に関する研究は増加傾向にある(加藤・浜崎・寺蘭・森野, 2008・田中, 2002など)。

保育者効力感とは「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念(三木・桜井, 1998)」と定義づけられるように、保育者としての自信を意味している。そして、効力感をどの程度持っているかが、個人の行動を規定することが指摘されており(板野, 1989)、保育者効力感が高い場合は、困難な場面に直面した際のストレス耐性を強くすることや、努力量を増すと考えられる。この様な視点から、保育者効力感と、保育でのストレス耐性を検討した研究では、保育者効力感が高い保育者ほどストレス耐性や保育への努力量が高いことが示されている(西坂, 2002)。よって保育者効力感

は、多様化する保育環境において、有効な保育を展開していく要因と考えられる。この様な観点から、保育者養成校に在籍する学生(以下、保育学生)の保育者効力感を高める要因を検討したものが多く(加藤ら, 2008など)。それでは、どのように保育者効力感は形成・発達していくのだろうか。

保育学生を対象とした保育者効力感研究として、中村(2006)は、短期大学生を対象に調査し1年生の方が2年生よりも保育者効力感が高いことを示している。また、石川(2003, 2005)も、短期大学生を対象に調査を行い1年生は、2年生よりも保育者効力感が高いとの結果を明らかにしている。これらの結果では、保育について多くを学び、実習も経験している2年生の方が、保育についてあまり学んでいない1年生よりも保育者効力感が低いことが示されている。また、加藤ら(2008)では、実習前と実習後の保育者効力感の高低を比較して、実習を経ることにより全体的に保育者効力感が高まることを示しながら、実習前に保育者効力感が高い保育学生は、実習を通じて保育者効力感が低くなりやすいこ

とも併せて報告している。

この様に、保育学生を対象とした研究では、養成校に在籍することで保育者効力感が向上するとの報告と、低下するとの報告が混在しており、一貫した結果が導き出されていない。加藤ら（2008）は、この要因として「保育学生の子どもの関わりの減少」を挙げている。すなわち家族内で子育てに関わる機会が減少していることや、都市化の進行により、地域で子ども同士が触れ合う機会の減少により、実際の子どものかけ離れた漠然とした保育者効力感が形成されている可能性を指摘している。そのため、入学当初の保育学生の保育者効力感は、実際の保育能力とは関連していないと主張している。

もし、保育者効力感が現実には即しておらず過度の見込みを持っている学生は、保育現場での成功を予測しがちであるため、実際に保育現場に身を置いた時に見込みとは異なる経験（失敗経験を重ねる）をする可能性が高い。このことから、加藤ら（2008）の研究では、“保育学生の保育者効力感が両刃の剣になる”との指摘もされている。よって、保育学生を対象にした保育者効力感研究では、単に値の向上を目指した研究だけでなく保育者効力感の質を追及する研究も必要であろう。

保育者効力感の質について言及した研究として、中村（2006）は、入学当初の保育学生の保育者効力感を「夢見る効力感」といった言葉で表現し、保育経験の少なさによって形成された効力感であることを示している。また、森野ら（2011）は、保育者養成の過程において、自信経験や自信喪失経験を要因として「夢見る効力感」から「身の丈効力感」へと変化する過程を示している。そこで本研究では、保育学生が保育現場に触れる機会として教育実習に注目し、実習前後の保育者効力感の質がどのように変化するかを検討する。

本研究では、保育者効力感の質へ影響を与える要因として対児感情に注目した。保育は子どもとの関わりを基本とするため、子どもへの感情が大きく影響している。近年の社会変化によって、子どもとの関わりが減少しているのであれば、実習を通じて子どもへの感情が変化することが予測され、その感情

と保育者効力感の関係も変化すると考えられる。

方法

調査対象者 保育者養成の短期大学に通う学生140名から質問紙を回収し、欠損値を含んだ10名を除いた130名を対象に分析を行った。今回の調査対象実習は学外幼稚園での教育実習であり、これ以前に附属幼稚園への観察実習と、附属幼稚園への教育実習、保育所実習、計3度以上経験した2年生であった。

調査期間 実習前の調査は9月上旬、実習後の調査は10月下旬に行われた。

手続き 実習前調査は、フェイスシート、保育者効力感の回答を求めた。実習後の調査は、保育者効力感尺度、実習評価の回答を求めた。質問紙は、実習前、後の調査とも授業中に同一の授業担当者により、授業中に配布回収を行った。調査に際しては、強制でないこと、調査以外の目的で使用しないことを質問紙に明記したうえで、了承された学生に対して回答を求めた。

内容

フェイスシート 実習前は、年齢・性別・学年・学籍番号を記入してもらい、実習後は、学生番号のみを記入してもらった。

保育者効力感尺度 本研究では、西山（2005）の作成した「人間関係」保育者効力感尺度を使用する。西山（2005）の尺度は、現役保育者と保育者志望学生を対象に、子どもとの人間関係に主眼をおいた保育者効力感尺度を作成している。その結果、最終的に12項目を採用し、信頼性、妥当性も十分な値を得ている。本尺度は、5件法（5.非常にそう思う～1.ほとんどそう思わない）で回答を求めた（項目の詳細は、表1に示す）。得点が高いほど、保育者効力感が高いことを意味している。

表1 保育者効力感尺度の質問項目

1	私は、子どもの自発性や主体性を尊重した遊びによる保育実践をできると思う
2	私は、子どもが友達との関係の中で、自己主張や自己抑制を学びとっていけるような保育ができると思う
3	私は、子どもとの愛情ある温かい人間関係を保育の中で実現できると思う
4	私は、子どもの人間関係の育ちによって一人一人の発達課題に即した援助ができると思う
5	私は、子どもが様々な人と触れ合いながら人間関係を広げていけるよう援助ができると思う
*6	私は、園生活の中で、必要な道徳性を身につけるように保育することは難しいと思う
7	私は、子どもが安心感をもてるように保育ができると思う
8	私は、子どもが自分を好きで、自信がもてるような保育が出来ると思う
9	私は、子どもの人間関係の広がりやを考慮したクラス編成や保育形態を実践できると思う
10	私は、子どもの共同のものを大切に、譲り合って遊べるように指導や援助ができると思う
11	私は、子ども同士のコミュニケーション能力を育む保育を実践できると思う
12	私は、保育の展開と人間関係の育ちを結び付けてとらえることができると思う

*は逆転項目

対児感情測定尺度 本研究では土居・大槻（1993）の対児感情測定尺度で使用されている項目を使用した。この尺度は、成人が子どもにどの様な感情を抱くのかを接近（例：かわいらしい）回避（例：きたない）という2つの側面に捉えており、他の対児感情を研究対象とした尺度と同様の因子構造を得ている。本研究では、保育者効力感との関係を検討する為、保育の対象となる幼児についてどのような感情を抱くのかを評定してもらった。ただし、土居・大槻（1993）では、尺度の作成手順が明らかになっていないことから改めて分析を行った。

結果

本研究の分析はSPSS（11.0J for Windows）を用いた。

対児感情について

本研究で使用した土居・大槻（1993）の尺度は、成人が子どもにどの様な感情を抱くのかを接近（例：かわいらしい）回避（例：きたない）という2つの側面で捉えており、他の対児感情を研究対象とした尺度と同様の因子構造を得ている。ただし、土居・大槻（1993）においては、尺度の作成手順が明確に示されていないため、改めて尺度を検討した。

まず、実習前の調査での全28項目の解答結果を用い、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行

った。土居・大槻（1993）をはじめ対児感情を扱った研究の多くは、2因子構造が想定されていることから、2因子構造を想定して分析を行った。その結果、6つの項目で2つの因子に.35以上の因子負荷量がみられたため該当項目を除外し、再度、因子分析を行った（表2）。

この結果から、第1因子は、“しあわせな”“すてきな”といったポジティブな項目で構成されていることから「接近」因子と命名した。続いて第2因子は“おそろしい”“うっとうしい”というネガティブな項目で構成されていることから「回避」因子と命名した。信頼性を検討するため、因子ごとに α 係数を算出した。結果、接近（ $\alpha=.84$ ）、回避（ $\alpha=.85$ ）ともに高い信頼性を有していることが示された。

続いて、実習後の回答を用い実習前に構成された22項目を対象に2因子構造で因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った（表2）。結果、実習前の因子構造と同様の構造をみせた。また、信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところ、接近（ $\alpha=.81$ ）、回避（ $\alpha=.84$ ）とも十分な信頼性を有している結果が示された。更に、信頼性を検討するため、実習前と後の接近得点と回避得点の相関係数をそれぞれ算出した結果、接近（ $r=.70, p<.001$ ）、回避（ $r=.62, p<.001$ ）ともに高い値を示し、十分な時間的連続性も保持していることが示された。

表2 対児感情尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）

実習前				実習後			
項目	質問文	I	II	項目	質問文	I	II
I 接近 ($\alpha=.84$)				I 接近 ($\alpha=.81$)			
27	しあわせな	0.76	0.13	19	すばらしい	0.71	-0.04
13	すてきな	0.75	-0.06	17	たいせつな	0.69	0.05
5	うれしい	0.69	0.08	25	おもしろい	0.69	0.24
19	すばらしい	0.64	0.03	13	すてきな	0.68	-0.07
11	ほほえましい	0.62	0.01	5	うれしい	0.67	-0.07
17	たいせつな	0.61	0.03	23	あかるい	0.59	0.21
25	おもしろい	0.56	0.04	11	ほほえましい	0.58	0.13
7	あたたかい	0.56	0.05	1	かわいらしい	0.56	0.04
1	かわいらしい	0.56	-0.13	27	しあわせな	0.56	-0.14
15	うつくしい	0.52	-0.09	7	あたたかい	0.54	-0.07
9	やわらかい	0.46	-0.06	15	うつくしい	0.54	-0.20
23	あかるい	0.38	0.03	9	やわらかい	0.52	-0.05
II 回避 ($\alpha=.85$)				II 回避 ($\alpha=.84$)			
12	おそろしい	0.15	0.67	10	わがままな	0.01	0.70
4	うっとうしい	-0.15	0.67	8	こわい	0.09	0.65
14	かなしい	0.09	0.66	6	たいへんな	0.27	0.65
16	きたない	-0.13	0.64	16	きたない	-0.16	0.61
26	さみしい	0.23	0.64	12	おそろしい	0.07	0.60
8	こわい	0.09	0.63	4	うっとうしい	-0.22	0.58
2	めんどうくさい	-0.22	0.62	14	かなしい	-0.06	0.55
22	じれったい	-0.15	0.57	22	じれったい	-0.03	0.54
6	たいへんな	0.15	0.54	26	さみしい	0.17	0.54
10	わがままな	-0.16	0.48	2	めんどうくさい	-0.26	0.51

次に、対児感情の推移を検討するため、実習前と実習後の対児感情（接近・回避得点）を対応ある t 検定を用い比較した。結果、接近 ($t(139) = 1.68, n.s.$)、回避 ($t(139) = 1.10, n.s.$) ともに有意な差は認められず、実習により対児感情は変化しないことが示された。

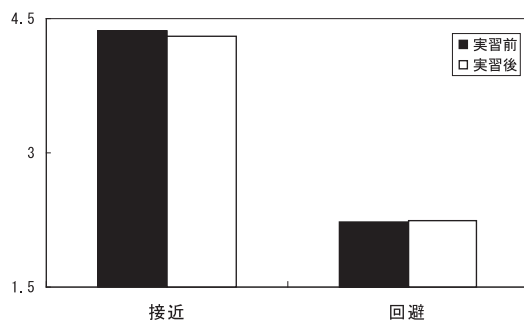


図1 実習前後の対児感情得点

保育者効力感と対児感情の関係

続いて、効力感と対児感情の関係を検討した。重

回帰分析をするため、実習前後の効力感と実習前後の対児感情の相関係数を算出した（表3）。結果、実習前の効力感と対児感情では、接近にのみ有意な正相関係数が算出された。また、実習後の効力感と接近では正の、回避では負の有意な相関係数が示された。

続いて、対児感情が保育者効力感に与える影響を検討する為、実習前・後ごとに対児感情を説明変数として、保育者効力感を目的変数とした重回帰分析を行った（図2）。結果、実習前では、接近から保育者効力感に有意なパスが引かれた ($\beta = .34, p < .001$) が、回避から保育者効力感には有意なパスは引かれなかった ($\beta = -.08, n.s.$)。よって、実習前は、子どもに対するポジティブな感情が高ければ保育者効力感が高まることが示されたが、子どもに対するネガティブな感情が、保育者効力感に与える影響は認められなかった。

続いて、実習後では、接近 ($\beta = .32, p < .001$)

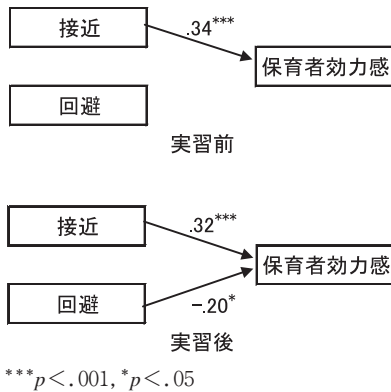
からは正の、回避 ($\beta = -.20, p < .05$) からは負の有意なパスが引かれた。すなわち実習後は、子どもに対するポジティブな感情が保育者効力感に高めるとの結果に加え、子どもに対するネガティブな感情が保育者効力感を低下させるとの結果が示された。

よって、ポジティブな対児感情と保育者効力感の関係は、実習により変化は見られないが、ネガティブな対児感情と保育者効力感の関係は、実習を経ることにより変化することが示された。

表3 保育者効力感と対児感情の相関係数

	実習前		実習後	
	接近	回避	接近	回避
実習前の効力感	.36***	-.16	—	—
実習後の効力感	—	—	.37***	-.27***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$



*** $p < .001$, * $p < .05$

図2 実習前・後の対児感情が保育者効力感に与える影響

考察

対児感情、保育者効力感得点の推移について

子どもとの関わりによって対児感情が変化するかを検討するため、実習前と実習後の対児感情得点の推移を検討した。結果、実習前と実習後の対児感情得点に有意な差は見られなかった。看護学生を対象に、小児看護実習の前後の対児感情得点の比較を行った研究(石松・江藤・山本, 1993)では、実習に

よって対児感情が変化したとの報告もあるが、今回の結果は異なった。この理由として、今回の研究対象者が保育を志す保育学生であったことが関係していると考えられる。石松・江藤・山本(1993)において、保育者を志す者は、看護志望学生や、他の学生に比べ、子どもへ好意的なイメージを持っていることが指摘されている。すなわち、看護を志す学生は、子どもに対するイメージを明確に持っていないため、子どもと関わることで感情が変化したが、保育者を志す学生は、子どもへ関わることを主目的となるため、子どもへの根強いイメージを持っていることから、変化が少なかったと考えられる。

また、今回の調査対象者は、対象となった教育実習以前にも、2度ほど実習を経験しある程度子どもに触れ合う機会を持っている。そのため、今回対象とした実習前から子どもに対する安定した感情を持っており、今回の教育実習では対児感情の変化には繋がらなかったのではないだろうか。

実習前、実習後の保育者効力感と対児感情の関係について

本研究では、保育者効力感と対児感情の関係を検討した結果、実習前・後ともに保育者効力感と、子どもに対するポジティブな感情との関連が認められた。保育を志す者は、保育志望理由として子どもに対する好意が比重を占めていることが指摘されている(長谷部, 2008)。このような子どもに対するポジティブな感情があるからこそ、保育者として関わることの自信や意義に結びつき、保育者効力感にポジティブな影響を与えたのではないだろうか。

一方で保育者効力感とネガティブな感情との関係を検討した結果、実習前は関係が認められなかったにも関わらず、実習後には関係が認められ、実習により保育者効力感の質の変化が示された。先にも挙げたように、保育を志す者は、保育志望理由でも子どもに対する好意が比重を占めていることが指摘されている(長谷部, 2008)。しかし、実際の保育とは、単に子どもと関わるだけでなく、子どもの発達を支えていくという役割も担う必要がある。特に、実習では自分の思いと子どもの行動がかみ合わない

こともしばしばある。実習を行う前は、子どもとの関わりも少ない上、保育者としても関る機会は稀である。よって、子どもとの関わりで上手くいかない場合でも、自らの保育能力とは結びつかなかったのではないだろうか。ただし実習では、子どもとのネガティブな関係により、失敗も多く経験する。加藤ら（2009）の研究では、実習評価と保育者効力感との関係も認められている。このことから考察すると、実習で成功経験が多い場合は、子どもに対する感情もポジティブに推移するが、実習での失敗経験は子どもに対するネガティブな感情や保育者効力感の低下に繋がる。よって、保育者効力感と対見感情との関係が示されたとも考えることができる。

まとめ

このように、実習前には、保育者効力感は子どもに対するポジティブな感情とのみ関係していた。これは、正に保育に対する憧れから形成された「夢見る効力感」といえる。しかしながら、実習を経ることで、子どものネガティブな感情とも関連をした「現実に即した効力感」へと変化したことが示された。この結果により、実習という保育に触れ合う機会によって保育者効力感の構成要素が変化し保育者効力感の質を高めるために重要な働きをすることが示された。この結果は、単に保育者効力感の向上を目指すのではなく、現実に即した保育者効力感を育てていく必要性を示す結果といえる。

そして今後、保育者養成校は、保育学生が「夢見る効力感」を持っていることを前提とし、実習前後の指導を検討していくことも必要となるだろう。具体的には、過度の効力感を持っているため、多くの失敗に遭遇し、そして失敗経験により、保育者の自信を失ってしまう可能性が高い。よって、実習前にもどのように失敗を受け入れていくのか、実習後に実習で起こった失敗をどう振り返っていくのかといったことへの示唆も検討していくべきである。このように実践研究につなげ、現実に即した保育者効力感を育てていくための養成プログラムを絶えず検討していくことが今後一層求められるだろう。

引用文献

- Bandura, A (1977) Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 長谷部比呂美 2008 進学志望動機に関する検討：保育・幼児教育専攻学生を中心として、淑徳短期大学研究紀要 47, 135-149.
- 石川隆行 (2005) 女子短大生の保育者効力感について. 日本発達心理学会第16回大会発表論文集. 635.
- 石川隆行 (2003) 保育者を目指す短大生の保育者効力感について. 一宮女子短期大学研究報告, 42, 315-322.
- 石松直子・江藤節代・山本捷子 2004 大学生の持つ育児イメージと対見感情：看護学科学学生と他学科学学生との比較. 日本赤十字九州国際看護大学 *intramural research report*, 2, 145-154.
- 加藤孝士・浜崎隆司・寺菌さおり・森野美央 (2008) 保育専攻短期大学生の保育者効力感と実習評価の関係—実習前の保育者効力感の高低の視点から— 応用教育心理学研究, 25, 15-23.
- 三木知子・桜井茂男 (1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 森野美央・飯牟礼悦子・浜崎隆司・岡本かおり・吉田美奈 2011 保育者効力感の変化に関する影響要因の縦断的検討—保育専攻学生における自信経験・自己喪失経験に着目して— 保育学研究, 49, 212-223.
- 中村多見 (2006) 保育学生の保育観 (1) —保育者効力感の発達—. 高松大学紀要, 45, 197-206.
- 西坂小百合 (2002) 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響. 教育心理学研究, 50, 283-290.
- 西山 修 (2005) 幼児の人と関わる力を育むための保育者効力感尺度の開発. 乳幼児教育学研究, 14, 101-108.
- 坂野雄二 (1989) 一般的セルフ・エフィカシー尺度の作成の試み. 行動療法研究, 12, 73-82.
- 田中昭夫 (2002) 保育者の蓄積的疲労徴候を過重にする要因・軽減する要因. 保育学研究, 40, 24-30.
- ¹⁾四国大学・²⁾鳴門教育大学大学院・³⁾倉敷市立短期大学・⁴⁾比治山大学・⁵⁾国際学院埼玉短期大学

付記

本研究は、2008年に第61回日本保育学会での発表の一部を加筆・修正したものである。